２０２１年2月9日（水）

老球の細道５９２号

スポーツとトランスジェンダー

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

「女性がたくさん入っている（スポーツ団体）理事会の会議は時間がかかる。女性は競争意識が高く、1人が手を挙げて発言すると自分も言わなければならないと思うのだろう。規制しないとなかなか終わらない」と、東京五輪、パラリンピック組織委員会会長の森喜朗元首相がJOCの臨時評議員会でコメントした。これが女性蔑視の発言であると大問題になっている。あらゆる差別を認めない五輪憲章の原則に反することや、現在の男女均等社会を目指す潮流になっている時に組織のトップとしては軽はずみな発言だった。私もジョークを言うときには十分注意しなければいけないことを学ばせていただいた。

ところで、スポーツ界ではもっとむずかしいジェンダーの問題が立ちはだかっている。多様な性が受容される時代にあって、スポーツ界は最も男女の分割が存在する世界である。そんな中で、東京五輪でも話題になると思うが、トランスジェンダー選手の競技参加である。

「トランスジェンダー」とは、生まれた時に割り当てられた性別（生物学的性）と自分自身が自認する性とが異なる人たちのことをいう。身体の性と心の性が一致しない人たちである。とりわけ競技性レベルの高いスポーツでは「女性であること」の厳密性が問われる。男として生まれて来たのだが、心は女であるという人たちの女子部門における競技参加が問題である。その逆は今のところほとんどないのではないだろうか。

ロンドン五輪、リオ五輪で陸上女子８００m金メダリスト、南アフリカのキャスター・セメンヤという選手がいる。この選手は子宮と卵巣がなく、体内に精巣があり、通常の女性の３倍以上のテストステロンを分泌する両性具有者である。この選手が五輪で金メダルを獲得した後、２０１８年に国際陸連は４００mから１マイルレースまでテストステロン値の高い女性の出場資格を制限するという通告を出した。キャスター選手はただちにスポーツ仲裁裁判所に提訴したが敗訴した。そのため、今回の東京五輪においては８００mには出場できず、やむをえず女子２００m走で出場することを昨年表明した。

このようなトランスジェンダー選手は米国スポーツ界でも問題になっている。米国のトランスジェンダー・アスリートの「男女の扱い」は各州に委ねられている。多くの州は「本人の認識している性別でスポーツ競技に参加させることが望ましい」となっているが、ある州では陸上の州大会で優勝を独占してしまうケースがあり、本来の女性たちが異議を唱えるケースが出てきた。そのため大会をボイコットする動きが出て来たり、ミス・ジェンダー（心と出生時の性が一致）の競技者数が減少する可能性が指摘されている。

この問題は、スポーツ競技の平等性、人権、運動能力の優位性に関する複雑な問題を提起している。また、あらゆる女性選手に対して、スポーツのためにテストステロンの値を低く保つよう要求することの医学的、倫理的問題についても同様である。

バスケットボール界も明日は我が身である。